



# ITプラットフォーム市場動向および 2018年度サーバ出荷実績

5月28日に、ITプラットフォーム市場動向および2018年度サーバ出荷実績に関する記者説明会を開催し、多数の方々が参加の下、以下の項目について報道関係者向けに発表しました。



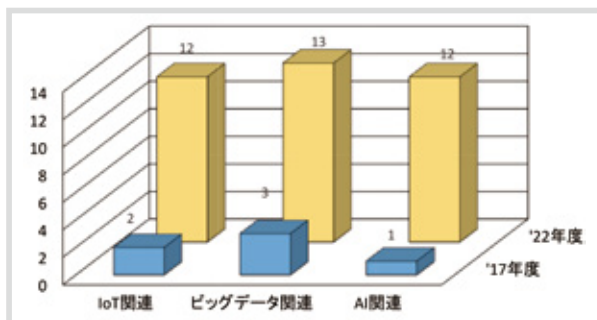
## ITユーザトレンド調査活動

ITプラットフォーム事業委員会では、1999年度からITプラットフォーム導入ユーザの動向をアンケート調査するとともに、その動向を発表しています。

ITユーザトレンド調査からは、以下のことがわかりました。

- ① 2018年度のIT投資は増加しており、この傾向は2019年度も続く見込みとなっております。
- ② サーバ統合、仮想化が進む一方で、クラウド化が更に進展すると思われます。
- ③ IoT / ビッグデータ / AIの活用は注目度、取り組み度ともに「業務の効率化」の目的の下に徐々に高まっています。また、RPA (Robotic Process Automation) も、高い注目度となっています。
- ④ 業務部門によるIT投資が増える傾向にあります。部門独自のITシステム導入では、情報システム部門と連携して導入することが求められており、当業界のベンダ企業もその一翼を担うことが必要と感じています。今後はこのようなニーズを捉えた活動も重要となると考えられます。

## 【IoT / ビッグデータ / AIの5年後の活用予測】



## 2018年度サーバ出荷実績

### 2018年度 総出荷実績

需要の中心であるIAサーバは、金額で上半期、下半期ともに前年を上回り、年度でも前年度を上回りました。

UNIXサーバは、金額で上半期、下半期、年度ともに前年を下回りましたが、台数では上半期、下半期、年度ともに前年を上回りました。

メインフレームコンピュータは、下半期は台数・金額ともに前年を上回りましたが、上半期、年度では台数、金額ともに前年を下回りました。

### 【2018年度 総出荷実績】

総出荷		2018年度上半期		2018年度下半期		2018年度	
			前年比		前年比		前年比
IAサーバ	台数	116,526	94%	134,809	95%	251,335	95%
	金額	98,556	112%	115,750	108%	214,306	110%
UNIXサーバ	台数	1,985	105%	2,147	115%	4,132	110%
	金額	22,864	97%	20,490	93%	43,354	95%
メインフレームコンピュータ	台数	104	84%	99	104%	203	93%
	金額	13,030	57%	17,342	106%	30,372	78%

### IAサーバの単価推移

IAサーバは、全体で6.58%の単価上昇であり、特にミッドレンジクラス(6.87%)が牽引しています。

金額ベースの機種構成は上位機へシフトしている傾向にあります(表1)。

### 2019年度以降の見通しについて

グローバル市場の不透明感がありますが、国内経済は、2020年に向けたインフラ投資やセキュリティ対応強化、超高齢化社会を見据えた働き方改革の推進など、需要拡大の兆しが見えています。

今後は、IoTの進展によるビッグデータの高速処理・解析、人工知能(AI)を取り込んだ更なる生産性向上や価値創造の動きなど、Society 5.0(超スマート社会)への変

革が求められています。

これらの動きに対応した下記の分野・領域において、ITプラットフォームの更なる需要拡大が期待できます。

- ①クラウドを活用したシステム・サービスの拡大に対応するデータセンター構築・増強
- ②社会や市場からの要請による、高度なサイバーセキュリティへの対応。
- ③システム運用効率化に向けたサーバ統合・仮想化からシステム統合への取り組み拡大。
- ④企業内ユーザ部門での利用拡大に伴う新たなサーバの導入。
- ⑤5Gなど通信インフラの整備やIoTデバイスの浸透に伴うデータ量の増加など市場変化への対応。
- ⑥ビッグデータの高速解析や人工知能(AI)による新たな価値創造への取り組み。
- ⑦働き方改革に伴う、業務自動化(RPA)などのITを用いた企業の生産性向上に向けた取り組み。

## サーバの年間総消費電力量に関する試算

### 2018年度のサーバの年間総消費電力量に関する試算

同事業委員会傘下のプラットフォームグリーンIT専門委員会では、自主統計を発表しているサーバ出荷台数と、省エネルギー効率化把握のために求めているサーバ定格電力を基準として、サーバの年間総消費電力量の推定値をまとめています。

今回、2001年度から2018年度までのサーバ出荷台数に基づく推定値と、2021年度までの予測値をまとめました。

2018年度は72億kwhの試算結果となりました。2017年度と比べ、2億kwh増となりました。物理サーバ1台当たりの年間消費電力量は増える傾向にあり、IAサーバの中位機クラスが仮想化用途で高機能化して、平均定格電力が大きくなっているためと推定されます。ただし、仮想化システムの普及に伴い、論理サーバ1台当たりの電力量は減少傾向にあると推定されます(表2)。

【表1:IAサーバの単価推移】

IAサーバ単価の年度推移	13年度(金額構成比)		14年度	15年度	16年度	17年度	18年度(金額構成比)		CAGR(13年~18年)
L2(300万円以上)	12.16	6.2%	9.06	11	11.10	12.90	13.05	7.4%	1.43%
L1(100~300万円未満)	1.82	12.3%	2.03	1.99	1.31	2.14	2.13	20.2%	3.15%
M(50~100万円未満)	0.84	40.6%	1	1.2	1.17	1.16	1.17	40.2%	6.87%
S(50万円未満)	0.39	40.9%	0.42	0.4	0.41	0.41	0.49	32.2%	4.57%
S2(25~50万円未満)	0.48	—	0.5	0.48	0.47	0.47	0.55	—	2.71%
S1(25万円未満)	0.28	—	0.33	0.28	0.30	0.26	0.29	—	0.43%
全体	0.62	100%	0.69	0.71	0.71	0.74	0.85	100%	6.58%

【表2:国内サーバ年間総電力量(推計/推移)】

